

## 家族の地域性と育児支援

○山下垂紀子（九州大学）

### 1. 家族の地域性からみる育児

本報告は、育児や育児支援を家族の地域性との関連でとらえる試みである。育児のあり様や育児支援については、地域という文脈から論じられたものは少ない。特に地域による家族の差違と育児のあり様についての連関が薄く、都市地域を中心として育児や育児サポートの研究が行われてきたといえる。

高齢化という社会変動とのかかわりにおいては、清水浩昭による家族の地域性に着目した研究が広く知られており、高齢者の子どもとの同居率や介護の面における検証が積み重ねられている（清水 1992, 2013）。また野沢慎司も家族とコミュニティの関係について、夫婦関係と夫と妻のパーソナル・ネットワークの地域比較に取り組んでいる（野沢 2009）。一方、育児において、もちろん地域差へ着目した研究がないわけではない。松田茂樹は、少子化論の展開において、祖父母や親族による育児支援と出生率の関連があること、また結婚や子育てに関する規範意識における地域差があることなどを明らかにしている（松田 2021）。また野沢を参照しつつ、都市度別に育児ネットワークが分析された研究もある（立山 2011）。しかしながら育児、育児支援のあり様を地域という枠組みで具体的に考察されたものは少ないのではないだろうか。

論を俟たないが、家族の地域差については、東北型と西南型に代表されるように村落研究や家族研究のなかで論じられてきた。本学会においても学会の研究活動の成果として刊行されていた「家族社会学研究シリーズ」において、『日本の家族と地域性（上）—東日本の家族を中心として—』『日本の家族と地域性（下）—西日本の家族を中心として—』が発刊されている。しかしながら、育児に関する研究においては、これまで地域性と関連がいささか弱いのではと考えたのが、本研究の出発点である。特に育児のあり様や育児支援について、地域性による説明は重要と思われ、本研究では、これまでの家族研究との接合を試みたい。

### 2. 徳之島伊仙町への着目

報告者らは、鹿児島県の徳之島にある伊仙町の出生率の高さに着目し、人口減少地域の生活維持の構造モデルについて検討してきた。住民を対象として実施したアンケート調査からは、子育て支援が得やすいことが明らかになった（詳細については吉武、益田により報告予定）。また当該地域には、「くわーどう宝（子どもこそ宝）」という諺があるように、子どもに対する規範意識が高いこともわかっている。また住民アンケート調査では、こうした就学期前の子育てサポートの豊潤さに比し、学齢期以降の教育にかかわる支援の心許なさも示唆された。

このように育児支援が多く得られやすい社会関係、子どもを貴重だと考える規範意識、教育と乖離しがちな状況については、出生率の高さと関連性があるであろう。しかしながら当該地域において、なぜこのような社会関係、意識が形成されるのかという点について、改めて検討する必要があるように考える。この際、本研究において参照したいのが、内藤莞爾の西南九州型家族の研究である。内藤は、いわゆる家族異質論の立場をとっており、九州の家族における末子相続や隠居制について研究の蓄積を積み重ねてきた。本研究では、伊仙町の育児や育児支援のあり様について、内藤の研究成果から読み解いてみたい。

（キーワード：育児、地域、西南九州型家族）

〔付記〕本研究は、2019年度～2021年度科学研究費補助金基盤研究（B）19H01562「過疎地域と地方都市間の関係分析による人口減少社会モデルの生活構造論的構築」（研究代表：高野和良、九州大学）の成果の一部である。